

《殺生石》——『玉藻前』絵巻と「女体」——

京都女子大学短期大学部准教授 川島 朋子

能《殺生石》は玉藻前の伝説を典拠としている。玉藻前という女性のことは南北朝時代成立の『神明鏡』に見えるのが最も早く、ここには既に《殺生石》と共通する内容が要素として含まれている。さらにこれが長大な物語として形成されたのが、室町物語『玉藻前』である。（題名は『玉藻前物語』『玉藻の草子』ともされるが、ここでは『玉藻前』と統一して称することとする。）

この物語のことを指すと思われる書名は『看聞御記』の永享五年（一四三三）五月七日条に「御乳人又内裏参。双子十帖愚童記 五条内義抄。 宝物集。玉藻物語。 応召進之。進被返下」と見えるほか、文明年間には「玉藻前物語」（『大乘院寺社雑事記』紙背文書、『実隆公記』）、「玉もの前と云女房の物語さうし」（『一禅御説』）という記載もある。赤木文庫旧蔵本には文明二年（一四七〇）の奥書があることから、文明以前にはまとまった形の玉藻前の物語が成立していたと考えられる。室町物語『玉藻前』と《殺生石》は内容も重なり合い、物語が《殺生石》の典拠となったことは、既に指摘されている（伊藤正義氏「殺生石雑記」『謡曲雑記』所収）。

しかし両者の関係は単純に断ることができない。その理由は室町物語『玉藻前』諸本は大きく二つの系統に分けることができるという点にある。物語の結末に源翁和尚が殺生石を済度する場面

があるかどうかで系統が大きく分かれ、この場面がない場合、退治された狐の尾から出た針が源頼朝に献上され、そのことにより頼朝が後に天下を治めたという話で終わる。一方、この結末を欠き、源翁の殺生石の説話を持つ系統は、より能に近い関係にあるのである。香西精氏は玉藻前と殺生石の話をはじめに一貫した物語の形でまとめたのは、この能の作者であったろう（『殺生石——作者と本説』『能謡新考』所収）と《殺生石》が『玉藻前』に先行するという見解を示すが、正確には既に成立していた『玉藻前』の物語から《殺生石》が、そして能《殺生石》によって『玉藻前』に殺生石説話が付加され、もう一つの系統が完成されたと考えるのが自然である。

それでは、《殺生石》から『玉藻前』への影響の可能性について見ていくことにしたい。物語の中でも殺生石説話の部分は《殺生石》と表現も重なり合うことが多く、構成そのものも能に非常に近いと言える。『玉藻前』では源翁（能ではワキ・玄翁）が那須野を通りかかると、そこに一人の女性が立ち現れ、源翁に殺生石の謂れ、つまり玉藻前のことを物語って聞かせる。

ところで源翁の殺生石済度の話は、福島県の常在院に蔵される『源翁能照大和尚行状之記』に見えるのが最初であるが、これは

源翁の弟子である大仙が、源翁没後三十年に際して記したものである。これ以後、源翁の殺生石濟度の話が玉藻前の説話と結びついて広く語られることになる。ただし他の殺生石濟度譚と『玉藻前』には違いがある。他の説話では源翁は殺生石のことを知った上でその濟度のために赴くという設定であるのに対し、『玉藻前』では先述したように、最初から殺生石の濟度を目的としていないという点である。源翁が殺生石のことを知っているならば改めて解説する必要性はない。また物語の中ではこれまでに十分玉藻前について語られてきたのであるから、読者に対して説明は不要であり、この女性の登場には物語上の必然性がないのである。にもかかわらずこのような設定をとるのは、能の前シテの里の女の影響であると考えるのが自然であろう。

ここで、先述の常在院に蔵される『玉藻前』の絵巻の最後の場面の挿絵に注目したい。この絵巻は殺生石説話を有する系統のものである。《殺生石》では「二つに割るれば」と大きな石の作り物が割れて後ジテが登場するが、この絵巻の挿絵でも、石が能の作り物のように真つ二つに割れている。しかしこの場面に該当する物語の本文には次のようにある。

石にせいあり。水にこゑあり。風はたいきよにわたる。かたちちは、せいこんにやどりしを。げんなふ、たちまちに、さつし給へば。大石すなはち、みぢんにくだけて。せきこんたちまち、じやうぶつするものなり。

ここでは《殺生石》に非常に近い表現でありながら「大石」が「みぢんにくだけて」と描写されているから、石が二つに割れているのは物語本文に忠実な挿絵とは言い難い。このような形状で石が割れる様子を描くのも、やはり能の演出の反映と考えられるのではないか。なおこの挿絵には二つの場面が描かれ、もう一図は源翁が殺生石の前で女に出会った場面であり、ちょうど能の前場と後場をそれぞれ描いたような形になっている。この前半の場面では源翁の同行者二人の姿も描かれており、これも能のワキツレを想起させるものとも言えよう。

そしてさらにこの絵巻で注目されるのは、二つに割れた石の割れ目から顔をのぞかせる野干が、明らかに女の鬼の体で描かれているという点である。

《殺生石》の後ジテは野干であり、詞章では「野干の形はありながら、さも不思議なる人体」あるいは「鬼神の姿」と表現されている。後ジテの装束については、例えば『江戸初期能型付』には次のように記される。

面、たかの面か、やかん。こ飛出か、しかみにても。赤頭。袖なし。半切。又はつび、肩ぬぎても。ぬがざる事、能か。

各流の型付や装束付において、大きく変わるところはない。しかし現在、金剛流と喜多流の二流のみにある小書「女体」では、後ジテも女の姿となる。この「女体」は金剛右京（明治五年、昭和十一年）によって考案された小書であるが、室町時代

成立の伝書である『舞芸六輪次第』に次のようにあることは注目される。

一、せつしやうせき。して、まへハ女也。つねのいてたち。

小袖。後ハつのうちたる女の鬼。小袖・大口。わきハそう

二三人計。

ここでは後ジテを「女の鬼」と記しており、「つのうちたる」つまり角を生やした鬼の姿なのである。ただしこれ以後には一切このような演出資料は見られない。「女体」という小書自体は新しいものの、古くにはこのような演出もなされていた可能性は大きい。そうした演出が、常在院の絵巻の挿絵にも反映されているのかもしれない。

さて、この「女体」については『金剛』第二十二号（昭和三十二年五月）の紙上において「殺生石」女体を観る」と題した座談会が、小野長生、坂本欣司、種田直太郎、渡会恵介、関米太郎の各氏、今井幾三郎氏の司会により持たれている。これは同年二月の定期能における豊島弥左衛門氏の初演を受けたもので、「この女体の小書は故先々代右京宗家の創作になるもので、東京に於て右京宗家によつて演じられて以来誰も舞つた者はありません」（今井）との発言を始め、大変珍しい小書の復活であることを各氏が述べている。

『金剛』第五十号（昭和三十五年九月）の「小書解説⑦」の解説によると、前シテが「面泥眼で唐織着流し」、後ジテは「九尾狐戴、黒垂、面霊女、白地舞衣、緋大口」という装束となる。

また別名「玉藻前」と称される時には装束が緋大口でなく、緋長袴に替わるようである。型の面ではクセが常の居グセから舞グセに替わるというのが大きな特色でもあるが、前掲の座談会の中で坂本氏は、右京の上演時（大正十一年）の坂元雪鳥による記録には舞グセの記述がなく、この時は常の居グセではなかったかと語っており、舞グセが右京による考案であるかどうかは定かでない。また前シテが作り物の大石に中入し、割れた石から現れた後ジテが大部分を一畳台の上で演じるというのがこの演出の特徴のようである。

『殺生石』の詞章にも『玉藻前』の物語中にも、狐の正体である鬼神が女の姿をしているという描写はない。ただ震旦、本朝において美女に姿を変えて王権を惑わした霊狐であるから、その正体に鬼女のイメージが生まれるのも自然なことかもしれない。「女体」はそのような『殺生石』の解釈の可能性の一つを反映し、悪女としての遍歴を持つシテの本質により迫ろうとする演出なのではないか。